

平成21年 5月28日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2006～2008

課題番号：18520197

研究課題名（和文） 19世紀アメリカ小説における感傷主義の研究

研究課題名（英文） A Study of Sentimentalism in the 19th Century American Fiction

研究代表者

森岡 裕一（MORIOKA YUICHI）

大阪大学・文学研究科・教授

研究者番号：20135635

研究成果の概要：19世紀アメリカの禁酒小説と家庭小説に見られる感傷主義に着目し分析を進めた。とりわけ禁酒小説に関しては、その代表的作品ともいえるT・S・アーサーの『酒場の十夜』の翻訳を解説とともに出版できたことは意義深い。また、「涙する少女」のモチーフを通して、禁酒小説と家庭小説に共通する特質を抽出し、その成果を口頭発表や講演で発表、さらには論文や啓蒙的文章という形で公刊しえたことは大きな成果だと自負している。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,200,000	0	1,200,000
2007年度	700,000	0	700,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計			

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ語系文学

キーワード：英米文学

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、平成8年12月、日本アメリカ文学会関西支部第40回支部大会のフォーラムにおいて、「酔いどれアメリカ文学」というシンポジウムを企画・実行し、好評をえた。その後同メンバーで共同研究を運営、2年間にわたる研究成果を、平成10年度科学研究費補助金の補助を受け、同年、共著『酔いどれアメリカ文学』（英宝社）として出版することができた。研究代表者が担当したのは「酔いどれアメリカ文学序説」と題した総論部（原稿用紙換算 約200枚）で、「酔いどれとエスニシティ」「酔いどれ・ジェンダー・

セクシュアリティ」「酔いどれと創造性」「酔いどれナラティブの系譜」の項目のもとアメリカ文学/文化と酒の関わりを多面的に分析した。

その後、研究代表者は平成13年度より4年間にわたる科学研究費補助金基盤研究一般（C）を受けることができ、当初計画にしたがって、19世紀禁酒小説の背景研究と代表的な作品の分析をおこなった。また、20世紀初頭の禁酒法時代のアメリカとモダニズム作家やその作品との関わりについても分析を行った。

その間、別の研究グループによる共同研究の

中で禁酒物語の構造分析を行い、その成果は平成15年度科学研究費補助金研究成果公開促進費の補助を受け、同年、共著『スモールタウン・アメリカ』（英宝社）として刊行された。研究代表者はその中で、「崩壊する町—禁酒小説とスモールタウン—」という論文を寄稿し禁酒小説全般の構造解明にいたる道筋をつけた。

平成16年度には、共編著『新世紀アメリカ文学史』（英宝社）という教科書を編集、出版する機会を与えられ、その中で、アメリカ文学の特質を表すいくつかのキーワードを設定し、それについて複数の執筆者によるミニ論文を掲載したが、自身も「酔いどれアメリカ文学」の項を担当し、短いながらもこれまでの研究成果の一端を披露することができた。上記研究の総決算として、平成17年9月には単著『飲酒/禁酒の物語学—アメリカ文学とアルコール—』（大阪大学出版会）を出版し、第一段階の研究の締めくくりをすることができた。本科研事業は、第二段階の研究のスタートとして位置づけられるものである。

この分野のすぐれた研究は少数ながらあるが、総合的な研究の進展は見られていない。また、それらの研究においても、ポー、ホーソン、ディキンソンといったメジャーな作家・詩人の酒に関する作品を分析したり、注目すべき禁酒小説にのみ焦点が当たる傾向があり、本研究が意図する総体として禁酒小説を対象とする姿勢は希薄である。わが国においては酒文化に関する文化人類学や国文学など個別文学畑の研究は散見されるが、アメリカ文学に限ればほとんど未開拓の領域と言っている。

2. 研究の目的

小説の分析を中心に19世紀アメリカ文化の特質を明らかにするのが究極の目的だが、本研究では、とりわけ1840年代、50年代の禁酒小説、家庭小説というサブジャンルに焦点を絞り、大量飲酒からの解放、女性解放（さらには奴隷解放）といった「解放の言説」に特徴的な感傷主義(sentimentalism)のレトリック分析の観点から19世紀中葉のアメリカ精神史を見直したい。そのためには次の三つのステップを踏むことが必要になる。

(1) ジャンルとしての禁酒小説を総体としてとらえ、その構造を解き明かしつつ、文学史の流れの中に位置づける作業がある。禁酒小説の大部分はプロパガンダ的性格が強く、当時の禁酒運動との連動関係を把握する歴史的視点が必要となろう。他方、一部の作品については文学作品として鑑賞に耐えるものもあ

り、その面からも再評価することが必要だと思われる。

(2) 禁酒小説の代表作、T・S・アーサー『酒場での十夜』（1854）と、同時代に出版されベストセラーとなったものの、その後文学史上からは消え去り、昨今再評価が進むスーザン・ウオーナー『広い、広い世界』（1850）、マリア・カミンズ『点灯夫』（1854）などに代表される家庭小説を比較検討することで、19世紀感傷主義の伝統をおさえたい。

(3) 上記すべてを総合する存在としてのハリエット・ストウ研究である。彼女の父は禁酒派の論客であったし、彼女自身、家族にアルコール依存症者を抱えてこの問題に関心が深く、「イーノック叔父さん」（1835）や、「サンゴの指輪」（1843）などの禁酒物語、あるいは、奴隷解放小説『アンクル・トムの小屋』（1852）においても禁酒のモチーフを展開している。とりわけこの小説では、禁酒小説に頻出する、幼い子供の夭折による罪深き大人の救済のモチーフが重要な場面で用いられており、禁酒小説と家庭小説とを架橋する絶好の資料となっている。また、ストウは姉とともに書いた『アメリカ女性の家』（1869）などでキリスト教精神に基づく女性の美德、理想の家庭の姿を説いており、小説『牧師の求婚』（1859）などと比較することで彼女の女性（解放）観をうかがうことができるものと思われる。

3. 研究の方法

研究を進めるうえで不可欠なテキスト入手に全力をあげた。古書市場、ネット検索、米国の友人を介しての購入、インターライブラリーローン等あらゆる方法を用いたが、国内外の図書館などへ出向き、資料のコピーをとる作業が大きかった。ハーヴァード大学英文科ニコラス・ワトソン教授、ペンシルバニア大学英文科デヴィッド・エスピー教授にはそれぞれの図書館所蔵の資料に関し教示を受けるとは大いに助けとなった。また、とりわけニューヨーク公立図書館のマイクロフィルム化された禁酒小説資料の収集は研究を進めるうえで、大きな力となった。

この3年間で収集した資料は日本国内ではほぼ入手不可能な貴重なものばかりであり、禁酒小説研究の重要な一次資料を収集できたことが大きな成果である。同じことは家庭小説についても言え、Catherine Maria Sedgwick, E. D. E. N. Southworth, Mary Jane Holmes, Augusta Evans, Susan Warnerらのテキストが入手できたことは大きい。

テキスト入手と並行して、入手したテキストの分析に全力をあげたことは言うまでもない。その際、「共依存」という視点を導入し、作品分析を行った。この概念はアルコール依存等で用いられる実践的概念だが、応用範囲は広く、人間関係一般に敷衍することもでき、きわめて有効な概念である。とりわけ、アルコール依存が直接に扱われる禁酒小説に応用することで、作品内の人間関係がきれいに説明できることが実証された。研究を推進するうえで、英米文学と依存をテーマとする科研共同研究プロジェクトに参加できたことは大きい。同時に、大阪大学英文学叢書の一冊として出版することを目的としたプロジェクトが発足し、研究代表者は中心的立場で共同研究をリードし、成果を研究書にまとめることが出来たのは大きい。

4. 研究成果

禁酒小説の古典、T・S・アーサーの『酒場の十夜』を解説つきで出版できたことは大きな成果である。この作品については前に出版した著書の中で詳細に分析しているが、テキスト入手が困難で一般の読者が原作を読む機会が少なく、翻訳の出版を契機にアメリカ禁酒小説への関心が深まることが期待される。前著ではスモールタウン小説と禁酒小説のジャンル横断にこの作品の独創性を見たが、同時に、家庭小説と共通の感傷性が見られる点があらたに発見できたことは注目すべきである。

また、その他の禁酒小説や家庭小説を広く取り上げ、「涙する少女」のモチーフという観点から分析を進め、一定の結論が得られたことは有意義であった。禁酒小説に見られる多くの家庭で共依存と言うべき状況が見られ、それを打破するうえで、幼い少女が大きな役割を果たしている点が顕著である。また、そうした家庭内の問題が近親相姦的なモチーフで描かれることを指摘し、それを共依存との関わりで分析しえたことも新たな発見である。19世紀アメリカ文学をジェンダーの視点で分析する切り口をつけることができたことと自負している。そうした研究の結果を学会のシンポジウムや講演で口頭発表し、またそれを論文で発表し、かつ、啓蒙的な場で公刊できたことも大きな成果である。その論文を含む共同研究の成果を共同編集できたことも特筆に価する。

さらに、昨年度の本務校における講義では、一学期にハリエット・ストウ研究、2学期には禁酒小説研究を行い、研究成果を大学院学生に披露し、それを題材に討論・検討するこ

とで、今後のテーマを模索できたことも収穫である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

- ① 森岡裕一、「少女の涙—禁酒小説における「共依存」とセクシュアリティ」、『「依存」する英米文学』、査読有、2008年、137-155頁。
- ② 森岡裕一、「酔いどれアメリカ文学」、『改定増補版 新世紀アメリカ文学史』、査読有、2007、175頁-185頁。

[学会発表] (計2件)

- ① 森岡裕一、「禁酒/感傷小説の物語学」、名古屋大学英文学会クリスマスセミナー、2007年12月21日
名古屋大学。
- ② 森岡裕一、「メディアとしての禁酒小説」、日本アメリカ文学会第46回全国大会シンポジウム、2007年10月14日
広島学院大学。

[図書] (計2件)

- ① 森岡裕一、堀恵子共編著、英宝社、『「依存」する英米文学』、2008年、238頁
- ② 森岡裕一、片渕悦久共編著、英宝社、『改定増補版 新世紀アメリカ文学史』、2007年、285頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者
森岡 裕一(MORIOKA YUICHI)
大阪大学・文学研究科・教授
研究者番号：20135635

(2) 研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし